

## 館山支部だより Vol.131

＜支部連絡窓口＞  
千葉県隊友会館山支部  
事務局(代表) 川村 巖  
〒294-0032 館山市笠名1357  
TEL 0470-22-0230



## 《ろうばい(蠟梅)》

中国原産、漢字では蠟梅、ただしロウバイ科、春につく実には毒性があるのでご用心を。江戸初期に中国から伝来したと言われる。＜拙宅の庭先から＞

今年も師走を迎える時節になりました。それにしてもこの夏の異常ともいえる長く続いた記録的な猛暑は忘れることができません。一方で“クマ騒動も”まったく意外でした。北海道のヒグマに限らず本州のツキノワグマがこれだけ人の生活圏に進出して害を及ぼしたことは全く考えてもみなかったことです。しかしながらいずれも自然現象とか野生動物の世界だけに原因があるのではなく、地球の温暖化(沸騰化)、クマ騒動にせよ人間様の生活(森林伐採とか生ゴミの管理等々)に起因することがあることも心すべきでしょう。

末尾になりますが会員諸兄、ご家族皆様方のますますのご健勝、ご多幸を祈念いたします。 《館山支部長 川村 巖》

## 支部の活動概要

## 《10・11月の活動実績》

- 10.10(金) 旧海軍館山砲術学校  
予備学生戦没者慰霊祭(安房神社)  
10.11(土) 県隊友会臨時支部長会議(千葉)  
11. 14(金) 館山航空基地殉職隊員追悼式  
館山航空基地開隊72周年記念行事  
11.29(土) 支部役員会(別法)

## 《12・1月の活動予定》

- 1月初旬 第21航空群司令年頭表敬  
(海自OB関係三団体代表)  
(土) 1月支部役員会(コミセン)

## 予備学生戦没者慰霊祭に慰霊顕彰の原点を見る

毎年10月10日には安房神社で旧海軍兵科3期予備学生戦没者の慰霊祭が行われております。 兵科3期生として館砲校に入校した1,440名中229名が戦没し、予備学生の中では一番戦死者の多かったクラスで、昭和45年(1970)に同期生たちの手で慰霊碑が建立され、毎年大勢の同期生たちが集いしめやかに慰霊祭が続けられてきました。しかし会員の高齢化に伴い平成11年には安房神社に慰霊祭の催行を委託し、以降神社の祭事として続けられてきたものです。

この度の慰霊祭に、ここ数年姿を見かけなかったE会長が、会員の子弟に付き添はれ車椅子で慰霊祭に臨まれたのには感動させられました。御年なんと104歳ということで、かつて慶応大学でエイトのレギュラーを務めたということもあり、今なお矍鑠(かくしゃく)たる気概が感じられました。

“存命中に最後の思いを果たしたい”とのE会長の悲願から、この度足腰の不自由さを推して八王子から遠路来館に及んだもので、かつて苦楽を共にし武運つたなく志半ばにして散華された同期生に対する切々たる思いが伝わってくるようで慰霊顕彰の原点を見る思いでした。

最後に祭主の“安房神社が在る限り、今後とも慰霊を続ける所存”の挨拶に儀式・儀礼を超えた真心が伝わってくるようでした。

《支部長 川村記》



## 《兵科3期予備学生戦没者慰霊碑》

229名の英霊の名が刻まれた慰霊碑の隣には、碑建立の30年後(H12)に「歴史の証言として散華した戦友の万感の思いを後世に伝えるため」に鎮魂碑が設けられ献辞が捧げられた。この時には全国各地から50名近い同期生たちが集ったと言われる。 《筆者注》

## 「大東亜戦争と太平洋戦争」 どう違うの？ (終戦80年に因んで)

現在、教科書や公的な場・資料等ではすべて「太平洋戦争」と表現されており、「大東亜戦争」の名称はほとんど見られないが結論から言うと両者は全く同じ戦争を指すのである。

昭和16年12月にマレー半島・真珠湾攻撃で火ぶたを切った戦争を、日本は国家としてそれまでの志那事変を含めて「大東亜戦争」と名付けた。ところが終戦時、GHQ(占領国軍総司令部)がこの戦争を「太平洋戦争」と名付け、以降「大東亜戦争」の名称を用いることを固く禁じた。この戦争の主な海空戦が太平洋海域で戦われたことは確かであるが、一方では広大な中国大陸はじめマレー半島、ビルマ、ボルネオ、インドネシア等 東南アジアを舞台にした戦闘が数多くあり、地理的に見ても太平洋戦争という呼称はピンと来ない。 GHQが敢えて戦争の名称まで変えさせた意図がどこにあったのか、模索してみることにする。

## 「大東亜戦争」とは・・・

大東亜戦争は、日本が欧米列強の植民地支配下にあった東南アジア諸国を解放し、大東亜共栄圏の建設を大義名分として戦った戦争であったが、敗戦とともに日本が行った“比類なき侵略戦争”として今日の歴史認識の大勢を占めている感がある。 日清・日露戦争以降、次第に中国・東南アジア方面への進出を強めた日本に対して、反日に転じた米国が露骨な対日経済制裁を加えた。そして開戦の年(S16年)、50回以上行われた日米交渉の最後に突き付けたのは「ハルノート」であった。これは日本に対して“幕末(の状態)に戻れ”を強要するものであり、宣戦布告に匹敵する最後通牒と言うべきものであった。

この時期、欧州大戦(第1次世界大戦)への参戦(武力支援)を強く求められていた米国は、ニューディール政策の行き詰りによる極度の経済不況に喘ぎ、失業者の増大に加えて国民の厭戦気分が漲っていた。これらの解決策として米国が求めていたのは他ならぬ“軍需産業の振興”による国家経済の急速な回復であった。 そのためにも米首脳部として“日本が戦争を仕掛けてくれること、日本に先に手を出させること”が最大の関心事であり、その方策を講じることに努力を傾注したことであろう。そして日本の宣戦布告が手続き上遅れたことは、米国にとって真珠湾攻撃を“騙し討ち”として国内外に宣伝し、欧州戦線参戦への格好の口実を与えることになったのである。ハルノートの提出直後、米作戦司令部がマッカーサーほか極東現地司令官等に発した「開戦近し、警戒を厳にせよ」の電報に米首脳部の“思惑”を見ることができるのである。 GHQが太平洋戦争の名称に固執したのは、日本が欧米列強の植民地支配からアジアの解放、アジア共栄圏の建設を戦争の大義としてきた思想・考え方を根本から是正しようという占領統治の一環と言えよう。なにしろ柔道、剣道も“武術”として禁じられた時代であったのである。

## 大東亜戦争・・・マッカーサーの“自衛戦争論”

終戦後のことになるが連合国軍最高指揮官として日本を敗戦に追い込み、日本の占領統治とともに東京裁判でA級戦犯を断罪したマッカーサーが、朝鮮動乱で要職を解任された後、米国上下院合同会議で行った退任演説で「日本が行った戦争は自衛戦争であった」と証言したことである(米国国立公文書館蔵議事録)。晴天の霹靂、まさに耳を疑いたくなるような証言である。演説は、日清戦争以降日本が歩んだ道程とともに、狭い国土に8千万の人口を抱え、あらゆる鉱植物資源、石油の産出がない日本がアジア・南方諸島に解決策を求めたのはごく自然なことである。日本を戦争に駆り立てた動機は安全保障上の必要に迫られてのことであり、侵略ではなく自衛のための戦争だった。米国が戦うべき相手は、日本ではなくソ連・中国という共産主義国家であった。といった趣旨のものであった。

日本を弁護する意図ではないであろうが、朝鮮戦争を通じて北朝鮮の背後にいるソ連・中国という共産主義国の脅威を痛感したマッカーサーの戦略思想からであり、トルーマン大統領および政権(民主党)を痛烈に非難したものである。その背景にはマッカーサー自身大統領選への出馬(共和党)の意図があり、要するに選挙演説にほかならなかったという見方もあるが、真意のほどは定かでない。

本題(ここで言わんとすること)は大東亜戦争と太平洋戦争どちらが(名称として)正しいのかということではない。なぜ戦争が起きるのか、なぜ悲争を防止することができないのか、どうしたら戦争を防止できるのか、といったことについての根本的な追究が必要と思うのである。 戦争の悲惨さ、むごたらしさを強調し、後世に語り継ぎ、戦争反対、不戦の誓いを唱えるだけでは戦争防止にはならない。精神論、感傷論だけでは通じないのである。

日米戦争も日本の一方的な軍国主義、侵略戦争だけで片付けることはできないと思う。前述のとおり、戦争が起きる、戦争を起こす原因には、経済的な要因だけではなく、その背後には必ずと言ってよいくらい政治、外交、場合によっては為政者の独断専行で事が進むことがあるのである。

3年目に入ったウクライナ紛争、米トランプ大統領が和平の仲介役を買って出ているが、ドンネス地方のロシアへの割譲はじめウクライナのNATOへの非加盟、軍隊の縮小等々、明らかにロシア寄りの提案内容でウクライナとしては到底受け入れ難い提案である。 大きな火だねを残すような提案では和平にはならないのである。

仮に84年前の日本が素直に？ハルノートを受け入れたとした場合、本当に戦争を回避できたであろうか。これで本当に“火種”が無くなるのだろうか。「幕末(の状態)に戻る」ことはあくまでも非現実的な“例え”であるが、要は戦争への突入を防ぐため日本は国として何をどうすべきであったのか、といったことについて具体的に説い